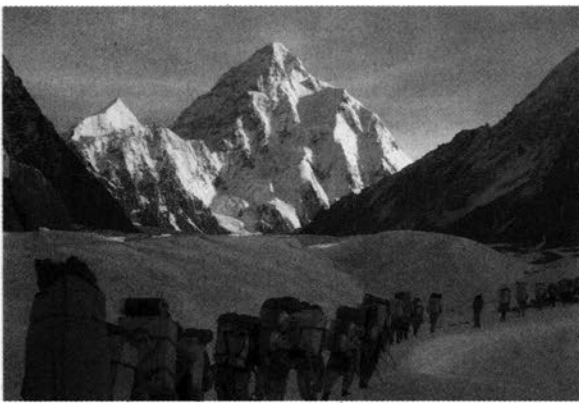




世界第二の高峰・K2に挑む

青年部

標高八六一メートル、世界第二位の高峰K2は、パキスタンと中国の国境、北緯三五度五二分、東経七六度三〇分に位置する、八千メートル峰の中でも屈指の急峻さと難度をもつ山である。

「非情の山」といわれるこの山には、一九五四年、イタリア隊の初登頂以来、その時のルートである南東稜をはじめとして、一九七八年アメリカ隊の北東稜、一九八一年早大隊の西稜、一九八二年日山協隊の北稜、一九八六年ポーランド・チェコ隊の南西稜、ポーランドペアの南壁、一九九〇年横浜山岳協会隊の北西壁―北壁上部、そして今回我々が採用す



1996年(平成8年)

3月号(No.610)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

世界第2の高峰・K2に挑む……	1
マカルー登山隊1995・日本スポーツ賞受賞……	2
追悼・金山淳二さんを偲ぶ……	2
海外の山……	3
報告	
沼尻・懇親スキー山行……	4
三水会・96年初詣……	4
自然保護随想……	5
東西南北	
ウエストン牧師の63年前の涙……	6
私の山の蔵書……	6
白神山地の入山規制について……	7
支部だより……	8
東海支部 岐阜支部	
図書紹介……	10
『知床記』『立山遊記・立嶽登臨圖記』『世界の山やま』『ネパールヒマラヤの山旅』『江戸百名山図譜』	
山の切手・6……	11
書籍受入報告……	12
平成7年度海外登山基金について	12
ルーム日誌……	12
新入会員……	13
会務報告……	14
INFORMATION……	15
創立90周年記念事業募金応募状況	15

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13～20時

る一九九四年スペイン隊による南南東リブの、計八つのルートが拓かれている。

登頂者は現在まで百人をわずかに超えた程度で、延べ六百人を超えるエベレストとは対照的である。

このたび、青年部が遠征隊を出す目的は、もちろんのことK2に登りたいということであるが、もう一つの目標は「次代を担う若手人材の育成」ということである。

青年部では、ここ数年来若手会員の育成を目指して海外遠征を継続してきた。しかし、参加した隊員の多くは、単に海外登山の経験を得たというにとどまり、「若手人材育成」という目的に関しては、必ずしも満足な成果が得られたとはいえない。そこで、このような状況に新しい活力を吹き込むべく、より密度の濃い登山を目指すべきだという結論に至

り、K2登山の計画が考えられはじめた。一九九五年マカルー隊の出発も間近に迫った頃であった。

■登山計画の概要

一、期間

一九九六年五月二十一日・先発隊出発(カトマンズ経由)

六月十日・キャラバン開始

六月二十日・ベースキャンプ到着

六月二十二～八月十五日・登山活動

八月末日・帰国予定

二、ルート

当初、最もポピュラーな南東稜を予定したが、過去の隊の残置物が多いルートの追従では目的に合致しないとの指摘があった。また他の数隊との競合が避けられないことも判明し、自分たちのペースで登山できなくなることを危惧して、南南東リブに変更された。

三、酸素使用について

キャンプ3(七四〇〇メートル)、
キャンプ4(七九〇〇メートル)の
睡眠用及びアタック時に使用する。
酸素使用についてはいろいろ検討
がなされた。無酸素で登攀できれば
それに越したことはないが、それに
固執するあまり、事故や手足を失う
ことがあってはならない、との観点
から使用することにした。

一般的にあまり知られていないこ
とだが、高所ポーターなしの有酸素
登山は各隊員に大きな負担がかかる
しかし、若い隊員のステップアップ
には逆に好都合と考えている。
四、隊の構成

隊長・山本 篤(33) 副隊長・松
原尚之(31) 登攀隊長・谷川太郎
(28) 登攀リーダー・稲葉英樹
(32) 登攀隊員・松本伸夫(30)
赤坂謙三(27) 亀山 哲(27)
岡本 憲(27) 長久保浩司(26)
村田文祥(26) 椎名厚史(25)
安島伸一(25) 吉田裕一(25)
竹内洋岳(25) 朱宮丈晴(24)
佐野 崇(23) 高橋和弘(22)
豊嶋匡明(21)
医師・一名 BCマネージャー・
高貝喜久雄(55)
連絡官一名 コック一名
キッチンボーイ二名
五、事務局・日本山岳会内

(山本 篤)

マカルー登山隊一九九五 日本スポーツ賞受賞

一月十八日、パレスホテル(東京
都千代田区)において、一九九五年
日本スポーツ賞(読売新聞社制定)
の表彰式が行われ、本会九十周年記
念事業のマカルー登山隊一九九五が
団体山岳部門で受賞、記念のトロ
フィーと賞状が授与された。表彰式
には、藤平正夫総隊長他隊員三名が
出席した。その後の受賞パーティー
では、選考委員や読売新聞社関係各
位と親しく歓談することができた。
選考委員会における授賞理由は次の
とおり。「五月にネパールと中国チ
ベット自治区の国境上にあるマカ
ルー(八四六三メートル)世界第五
位)に未踏の東稜から登頂した。東
稜は約一〇キロメートルにも及ぶ長
大な岩稜で、標高四三〇〇メートル
から七〇〇メートルまで岩と氷の
ミックスした壁、そこから頂上まで
険しい岩稜となっており、極めて高



ルームに展示中の記念トロフィー

い総合技術を要するルートだった。
この成果は、世界の登山界において
も、高く評価されている」

トロフィーと賞状は、当分の間
ルームのロビーに展示し、会員の皆
様に披露しております。(渡邊雄二)

追悼 金山淳二さんを偲ぶ



越後支部・佐藤晴夫

昨年十二月四日、「金山淳二さん
急逝」の報に驚かされました。十月
の日本山岳会九十周年記念式典では
名誉会員に推挙され、晩餐会でお元
気に乾杯の音頭をとられた金山さん
(写真)。つい十日ほど前、長岡山岳会
五十周年記念パーティーの際も、主
賓としてご出席、夜遅くまでお酒を
飲み、青年のように山を語っていた
金山さん……。名誉会員バッジを胸
につけた葬儀の遺影はまわりを日本
山岳会、慶応義塾登高会、長岡高校
山岳会、長岡山岳会その他たくさん

の生花に囲まれ、県内外からの多数
の岳人に見送られての、山の香気が
漂う、いかにも金山さんのお別れに
ふさわしい立派なご葬儀でした。

金山さんは昭和のはじめ、長岡中
学在学中に、県下の学校に先駆けて
山岳スキー部を創立しました。その
後の慶応山岳部時代六年間の活躍は、
剣八ツ峰の積雪期初登攀など登山史
に輝くもので、足跡は日本アルプス
を中心に北海道から遠く千島列島の
山にまで及んでいます。卒業後は鶴
沼に居住、日本山岳会で学生部の指
導をしながら、ヒマラヤ遠征の想を
練っていたと聞きますが、その夢は
戦争と戦後の病氣(結核手術で四年
間入院)のため、ついに実現に至ら
ず、無念さは察するにあまりありま
す。しかしこの病氣のために故郷長
岡に定住されることになったのは、
地元にとって幸いなことでした。

昭和二十九年、当時の長岡山岳会
会長鷲尾彦七郎氏が、三顧の礼を尽
くして年下の金山さんを後任会長に
迎えられたのは本当に素晴らしいこ
とでした。病後を理由にひたすら固
辞された金山さんもういに押し切ら
れ、日本山岳会生みの親の一人高頭
仁兵衛翁(日本山岳会元会長・当時
長岡市郊外の生家で静居中)を名誉
会長に戴くことを就任の条件とされ
たのでした。幸い翁の快諾を得たわ

けですが、こんな豪華な顔ぶれの山岳会が日本中のどこにあったでしょう。金山さんの説くアルピニズムに共感し、金山さんを慕う者は長岡山岳会のみならず、市内の各山岳団体に広がり、それは長岡市山岳連盟の結成へと進みました。市岳連の初代会長に推された金山さんは、豊かな人徳と人脈で、毎年市民のために中央から有名な登山家を招いて講演会や遠征報告会を開催し、長岡市は地方都市らしからぬ登山文化圏を形成していったのです。後年、金山さんが市の表彰を受けたのも当然のことでした。

金山さんは私にとっては、高校山岳部の伝説的な雲の上の大先輩でした。大学卒業後日本山岳会に入会し、さらに長岡山岳会にお誘いいただきました。爾来四十年間の交誼、薫陶に心から感謝しております。

私の山の話をいつも目を細めて聞いてくださいました。昨秋の石狩岳からトムラウシ、十勝縦走の話をした折には、金山さんは六十数年も前の石狩沢やトムラウシの思い出を、驚くほど鮮明に話されました。そんな話も、もう聞くことができなくなりました。どうか天国から私たちの山を見守っててください。

金山さん、どうぞ安らかに……。

台掌。

海外の山

アスコレ村への思い

江本嘉伸

「山屋」は大嫌いだっただと、と神戸市灘区に住む会社員、上田文子(四八)は、「ヒマラヤン・グリーン・クラブレポート」最新号の中で書いている。

小学生の時、母の郷里の新潟へ行くたび「列車の窓から乗り込んで、仲間の座席が確保でき、うかれていく『山屋』の『一団』を見たのがそのきっかけだった。

はたちぐらいから高原歩きをはじめ、花を求めて山歩きが生活の一部になった今も「子供の時に見た『山屋さん』、他者に被害を与えてしまいう『山屋さん』していないか、脅え続けていた」。

遠藤京子が代表をつとめるヒマラヤン・グリーン・クラブ(H・G・C)を応援するようになったのも「アスコレ村とかかわり合うことが、山や自然への私からのお礼です。山歩きをし草花を踏みつけたお詫びです」と結ぶ。

遠藤たちは九二年以来、カラコルム山脈へ通う登山家にはおなじみの、パキスタン・バルトロ街道再奥のアスコレ村を基点に上流のオアシスで植樹活動が続けている。仕事の都合で海外の山には行けない上田は、最近亡くなった山の知人二人の分も含めて「三本分の苗木」をカンパした。それがいつか「給料日ごとに五千円」に変わった。

上田は大の犬好きである。遠藤京子のことも、捨てられた犬を連れて山に登る話を遠藤が山の雑誌に書いたのを読んで知った。

九五年一月十七日もいつものように早朝に起きだし、近所の寺が引き取っている四匹の迷い犬の散歩につきあった。

犬たちを寺に返してから、やはり日課としている神戸大学の構内の野犬のいるところに立ち寄った。犬たちに挨拶した後、腕立て伏せのトレーニングに励む。腹筋鍛練を終えて立ち上がろうとした時、ぐらりと地が揺れた。急激な運動の直後なので「めまいがした」と思った。

次の瞬間、近くの工学部の計測機器が破裂する音がした。こんどは「爆発!」と思った。

そうではなかった。大きな地震が起きたのだ。

母親のことが心配になり、ともかく家に帰ろう、と歩きだしたら、負傷した神戸大生から「電話ボックスまで連れてってください」と頼まれた。この時期論文書きのために大学内に泊まり込みで頑張る学生が多い。学生たちを助けてから帰宅。母親は無事だったが家は半壊していた。

廃墟の中で勤め先の会社の神戸復興の仕事に携わりつつ、遠いヒマラヤ山麓の村、アスコレへの思いは変わらなかった。毎月給料日が来るたびに五千円をこの村の緑化経費の一助にと、送り続けている。

「日本では、五千円では家も建たず、教師も雇えないけど、ヒマラヤでは十〜二十倍にも活用してもらえから」というのが上田の弁。「もったいなくなるので」総額は数えないそう。お節介ながら累計はもう二十万円になる。

千葉工大ナンガバルバット登山隊のように熱心に支援してくれた隊もあるが、総じてH・G・Cの活動について「『山屋さん』がそっぽを向きがちなのが残念です」と遠藤は語る。アスコレ村までわざわざ出かけて植林してくれる仲間には「山屋でない人」が多いという。

人それぞれだ。上田はいつかアスコレ村へ行けるだろうか。

報 告

REPORT

沼尻・懇親スキー山行

西吾妻山から滑降……

集会委員会

一月十三日から十五日、恒例の懇親スキー山行が裏磐梯沼尻高原ロッジを基地として行われた。参加人員六十二名。首都圏のほか青森、関西、



快晴の西吾妻山へスキーツアーの一行

新潟から駆けつけた会員もいた。

十二日夜、新宿をバスで出発。翌朝早く、新年寒波で積雪たっぷりのゲレンデ前のロッジに到着、仮眠をとった後ゲレンデに散った。無風快晴の天気は誘われ、安達太良山の支峰、船明神まで足を延ばす者、一級の腕前を持つ集会委員を講師とするレッスンに参加し、永年凝り固まった我流を直そうとする者、それぞれに楽しんだ。

夜は現地参加組も加わり、懇親会が行われた。いつものように豊富なアルコールが用意され、青森から参加の高橋氏差し入れの新鮮な帆立貝をメインディッシュとして、ユーモアに満ちた自己紹介などに時の経過を忘れた。

明けて十四日も快晴。グランデコスキー場から西吾妻山へ登る組三十一名、残りはグランデコスキー場あるいは箕輪スキー場で楽しむ組に分かれた。

登山組は記念撮影の後グランデコへ急いだ。ゴンドラが猛烈に混雑しており、リフトで登る。最上部リ

フト終点からは二組に分かれ、先発は十時五十五分にシールを着けて出発した。林に入るとそこは静寂と幻想の別世界。針葉樹に降り積もった雪が厳冬とは思えない暖かい陽射しに輝いている。五十分ほどの急登で樹林帯を抜けると大展望が広がった。近くに磐梯、安達太良、鏡のような猪苗代湖、会津の山々、人を寄せつけない厳しい山容の飯豊山、遥かに日光連山まで見渡された。

西大嶺には正午に着いた。西吾妻山に連なる山稜に樹氷が輝き、鞍部に煉瓦色の避難小屋が存在を誇示している。避難小屋で十分休憩、昼食をとった。三十分遅れで出発した後発組の姿が西大嶺の頂きに見える。

再び西吾妻山へ登り返し、待望の滑降が始まった。中川リーダーを先頭に、密集した木々の急斜面をスピードを押さえながら滑降。傾斜の緩やかな二十日平で後発組を待ち、記念撮影をして初めて大休憩をとった。暖かい陽射しに気がなごむ。

針葉樹から疎林の落葉樹に変わった斜面は滑降に好都合だが、水分を含んだ雪が日が傾くにつれて締まりだし、雪質はあまりよくない。各自の技量に合わせて回転を繰り返す。

最後の中の沢の登り返しは、疲れている体にはこたえた。スキー場に滑り込んだのは三時五十七分、疲れた

が満足感一杯で、予定時間ちょうどにバスに乗り込んだ。しんがりも十五分と遅れずに到着。さすが日本山岳会というところである。

宿では豊富な温泉が疲れた体を待っていた。夕食には集会委員会気配りの生ビールが用意された。夕食の後には集会委員会手作りのゲーム大会で大いに盛り上がった。

十五日は暖かい小雨で明けた。各自沼尻スキー場で最後のスキーを楽しんだ後、途中の道路の混雑を見越して、予定を早めて十二時に出発。

久しぶりに参加した家内はロッジオーナー、あこがれの田部井さんにお会いできて大満足。お陰で当分我が家は「事も無し」であろう。

(小林義亮)

九六年初詣

西上州・不二洞鍾乳洞

三水会

新春恒例の初詣山行を、一月六日(七日、エーデルワイスクラブと合同で行った。

六日、西武秩父駅に高田、坂倉ほか十二名が集合。秩父神社へ初詣。武蔵屋そば店で昼食後、タクシー三台に分乗して万場町へ。まず、南毛霊場二十六番大林寺にお詣り。ムサ

自然保護随想

人心を映す鏡

蜂谷 緑

「自然は人間の心を映す鏡である」と言ったのは画家の東山魁夷氏。今から二十年以上も前に聞いた講演の中のひとことが、いつも私の心の底に尾を引いている。

自然の中には、むろん身近な里山のそれも含まれる。暮らして密着している里山の状況は、地域の人心をじかに反映するともいえる。

最近、二つの事例に出会った。

一つは伊豆の大島。一時期の離島ブームが過ぎ、三原山噴火の悪夢を経験したこの島には、離島振興法による多額の補助金が投入されている。すでに溶岩流対策事業や道路建設が島を変え、続いてはジェット機の離着陸を可能にする空港拡張工事が待っているという。そのためにスタジイ・タブノキの原生林や貴重なラン科の植物をもつ里山、愛宕山が障害物として削られるというので反対運動が起きている。

昨年十月、その大島で「水と緑の

国際シンポジウム」が開催され、私も参加した。このイベントを機に、島民の自然への関心は深まったものの、それが直ちに反対派勢力に結びつくというものでもない。訪れた愛宕山の中腹には小さな社があった。空港拡張の犠牲になるのが古くからの信仰の山だということに、寒々とした思いが残った。

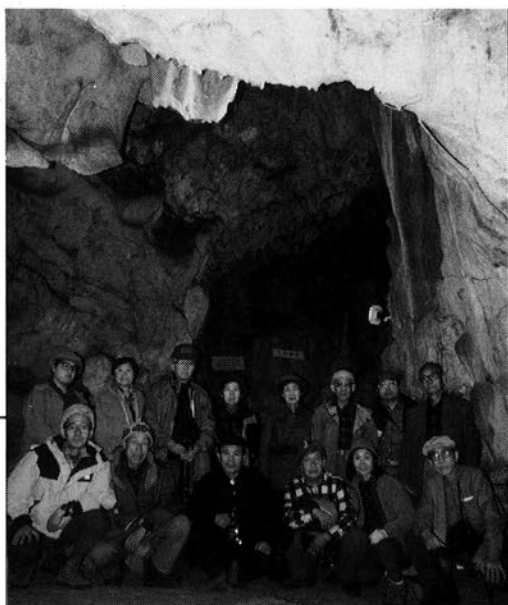
もう一つは勝沼の思入山。中央

線で甲府盆地が開けると同時に目前に現れる里山だ。『甲斐國志』に「山勢婦女ノ臥容ニ似タリ」とあるこの山、今では「ぶどうの丘」として町の観光の拠点となっているために、せつかくのビナスの肌もすっかり潰瘍が進んでしまっ

た。その上、近く大型農道という名の観光道路が建設されるとか。勝沼からの山岳展望は日本でも有数の景観だと私は思っているが、その貴重な前景を破壊して何の観光道路だろうか。ここにも目先の利を追う心の貧しさがのぞく。

補助金による公共事業の代償として失うものは自然ばかりではない。深刻なのは後に残る人心の変容と荒廃である。生物のいのちを守る自然保護とともに、人々の心を育む景観の保全にも、もっとも

っと力を入れたいものである。



不二洞鍾乳洞入り口で

宮で、ガイド付きである。ドアの鍵を開けて、洞内に入り、上へ上へと登って、五〇〇メートル歩く。あまりよい鍾乳洞ではなかった。

今井屋に戻って、うどん昼食。志賀坂峠を越え、八丁峠に回ろうとしたが、積雪が溶けて凍り、断念。小鹿

野町の三十一番札所観音院を経て、西武秩父駅で解散。(石田稔郎)

サビは剝製になって見参。続いて中里村の二十六番徳昌寺へ行く。南毛霊場は秩父の札所に比べ、内所が苦しいようであった。次は上野村へ進み、今宵の宿・今井屋に到着。この旅館は日航機事故の時、報道関係者の宿になったところか、色紙が飾ってあった。

夕食はイノブタ鍋で、この地の名物のようだ。食事中、木村代表代行が飛び入りで参加、座は大いに盛り上がった。二次会では、K先生が秘伝の踊りを披露されるほどの賑わいであった。

七日、二・五キロの舗装道を歩いて不二洞鍾乳洞へ上がる。車を利用しない団体が、地元の人には理解できなかったようだ。不二洞は村の経

明日を築き業界をリードする

コンクリート製品の総合メーカー

前田製管株式会社

本社／酒田市上本町6-7

☎ (0234) 23-5111

東西南北



カット 中村あや

ウエストン牧師の 六十三年前の涙……

宮崎支部・児島実照

ちょっと間延びしたレポートになるが、平成七年十一月三日の「第一回宮崎ウエストン祭」での宮崎支部長の挨拶要旨を敢えて紹介したい。前略、……「かつて、ウエストン牧師が「九州の軽井沢」とたたえられた風光明媚なこの三秀台は、百年過ぎようとも変わらず今私たちを温かく迎えてくれています。変化こそ進歩という人もいるかも知れませんが、私はこの変わりなき三秀台の風情に毎年出会えることを無上の喜びとしています。砂利道が舗装に変わっただけで、山も里のたたずまいもそのままの姿に、多くのことを学び心安まる思いをいたしております。さて、この機会に五ヶ所小学校の皆さんにウエストン牧師と私も日本山岳会との関わりについて若干お

話申し上げたいと存じます。

ウエストン牧師は今から百三十三年前の文久元年十二月二十五日、英国ロンドンのダービーで誕生されました。ケンブリッジ大学を卒業、牧師として布教に努められ、昭和十五年三月二十七日に七十八歳で生涯を終えています。この間三回来日、足かけ十五年ほどを日本に滞在されています。最初の来日は明治二十一年二十八歳の時です。祖母山に登られたのは、明治二十三年三十歳の時です。熊本から馬車で河内の「かじや」という宿に一泊、三秀台を経て祖母山に登られました。登りに五時間、下山に四時間三十分かかったそうです。日本に來られて一番目の山が富士山、二番目がこの祖母山です。この年に鹿児島島の桜島、宮崎の霧島山にも登られています。その後、日本アルプスの山々を登られ、あの名高く名著とされる「日本アルプス、登山と探検」を出版され、世界に紹介されたわけで、日本近代登山の父と

いわしめたのであります。

ウエストン牧師は日本山岳会の会員で会員番号が二四九番、あの丘に記念碑がある秩父宮殿下も日本山岳会名誉会員で、大正十五年八月にウエストン牧師ともどもスイスのアルプス登山をされています。

いま、自然の大切さが強調されています。自然の尊さについてウエストン牧師の側面を知るエピソードが残っています。昭和八年の春、当時の日本山岳会長がロンドンのウエストン牧師を訪ねた時、「上高地にホテルができるというニュースは本当ですか」と尋ねられ「本当です」と答えたとたん、ウエストン牧師は窓際に立つて外を向いたまま目に涙をいっぱいためられていたということなんです。どんな涙か知ることにはできませんが、この涙の中に国境を越えた日本への親愛の情を見ることができそうです。六十三年前の昔に、ウエストン牧師は現在の日本の自然環境の変化を予測されていたのです。

私たちは自然を守るために、自然を傷つけながら山に登っています。この現実、どう対応すればよいのかといつも悩んでいます。皆さんがお待ちなのパンフレットにある日本山岳会独自の「山を美しく保つために！自然保護憲章」も制定して努力しています。今、ウエストン牧師の涙の

意味するところを十分かみ締めながら、素晴らしいこの三秀台の景観を末永く私たちと同じように体験することのできることを、皆さん方の次の世代まで残すための努力をしようではありませんか。……

自然破壊で植物生態が変わってゆく現実にあつて、支部員一人ひとりがもっと声を大きくして自然保護の大切さをアピールしたい。

私の山の蔵書

柴田雄二

私の蔵書目録は著者名、書名、出版社名、出版年月日、購入書店名、購入年月日を簡単に記入した大学ノートであった。ノートを作ったときは、本がある程度たまったら整理分類するつもりで、第一冊目は『上越の山』（日本登高会・三省堂・昭和十二年）から始まり、『上越国境』（角田吉夫・大村書店・昭和六年）、『上越の山と溪』（中村謙・朋文堂・昭和十五年）と続いている。この後分類をやめ、買ったときに記載することにした。

学生時代は少ない小遣いだったから、本を買うと山に行けなくなる。サラリーマンとなつては、酒に多少出費が回り、家庭を持てば、ますます

す山の本来に小遣いは回らない。本を増やしたい気持ちも、蔵書目録ノートに次のように書いている。

「私なりの山書が三百冊を超えた。まだ独身の頃には『私なりの山書』を取り敢えず三百冊と考えていた。遅い結婚をして長女が中学一年生となっている、この年になってのようやうの三百冊である。怠けたが、小遣いが山書に回らなかった事情もある。ようやく三百冊でもまあまあか。まだ三百冊と自分を責めない事にする。

山書との付き合い、これからも私なりでいけるだろう。『他』を打ちやうの『山書マニア』の道もあるが、英独仏のいずれも原書で読めぬ私なれば冊数にこだわる事はしない、とせねばなるまい。(一九八四年二月)」

一九八九年の秋、脳内出血に見舞われてしまった。それで、リハビリと山に行かない暇つぶしで蔵書ノートをワープロで打ってOB会の仲間に配った。まだ山を罷めていない事を見せたかったのである。一九九〇年の秋でちょうど四百冊を超えるところであった。

蔵書は、著者別に並べることはしていないが、多いのは大島亮吉、今西錦司、松方三郎、ガストン・レビュファなどではなからうか。

KACGS-Itoh が所蔵した大島亮

吉『山—研究と随想』(岩波書店・昭和五年)は古書店で入手してから三十数年を経て、サインが京大ANA(伊藤藤原と確認できた。伊藤藤原は昭和三年三月の穂高での大島亮吉の遭難に遭遇していたのだ。榎有恒の『山行』(梓版・図書院・昭和二十三年)は元の持ち主が浦松佐美太郎と分かって買ったものだ。「敬呈 浦松佐美太郎様 榎有恒」とサインの筆遣いに魅せられて、自分の蔵書にしまった。

近頃では古書店で見られなくなった本もある。イタリアの写真家であり、探検家でもあるヴィットリオ・セラの写真集『ヒマラヤの面影』(Vittorio Sella IMAGES DE L'HIMARAYA, Alpina)は大型のカメラを担いで、大判の迫力あるバルトロ氷河の峰々を写している。登山家の日記から取り出された心象風景を、随筆と小品に編んだハンス・モルゲンターレルの『山!』(荒井道太郎訳・明文堂・昭和十六年)は表紙に描かれた山靴の絵が「遠く彷徨せるもの」と題されて懐かしい。大事にしている本だ。

山岳書を蒐めることはとうの昔にあきらめ、私なりの山の読書を楽しんでいる。現在の蔵書は多くもなく、と言って、少なくとも約四百七十冊である。

白神山地の入山規制について

石田稔郎

白神山地には、平成二年から営林局が森林生態系保護地域を設け、核心部である赤石川、追良瀬川の源流域は、保存地区として、すべての人を統制しようとしてきた。当初、私は原生林を保護するためには、一定の規制はやむを得ないことかと思っていたが、白神山地に行ってみてから考えを変えた。

入山規制は、営林局が春秋林道の建設(ブナの伐採)を断念した、しつぱ返しとしか思えないのである。その証拠には、保護地域の周辺ではブナの伐採が依然として続いているのである。

昨年九月四日、白神山地世界遺産地域連絡会議(環境庁、林野庁、文化庁、青森県、秋田県)が管理計画骨子案を発表し、九月十一日に青森県大鰐町において、意見を聴く会を催し(反対意見が多かった)、二十日までに意見書の提出を求めた。この管理計画の問題点は、「基本方針が、世界遺産一覧表への登録による知名度の上昇に伴う入山者の増加により、遺産地域の自然環境への影響が懸念」として作成されていることである。

白神山地の核心部には、観光目的の入山者などは入山不可能であり、溯行技術をもつ登山者が、残雪期、無雪期に入山できるのであって、増加するのは規制地域外の白神岳への登山客や、県道白神ラインを通行する団体観光客なのである。それを見込んだように道路改良工事も進められている。

また入山規制では核心部の既存の歩道の登山を除くとしているが、既存の歩道は現在はない。白神岳から向白神岳への稜線を指しているようだが、通行不能であり、営林局の調査不足か、作為のように思える。

赤石川、追良瀬川の源流域(遺産地域の核心部)には、高さ四〇メートル、五〇メートル、八〇メートルの滝もあって岩壁登攀の対象であり、一帯は積雪期登山も盛んに行われてきたところである。

環境庁は十一月二十一日、管理計画を決定して発表した。内容はほぼ骨子案と同じであるが「入山規制の方法はさらに検討する」としている。

これは登山者の規制に反対した日本山岳会・青森支部、青森岳連、日山協の要望を考慮にいたれたものであり、今後は地元岳人と、連絡会議の折衝によって、核心部の入山者の特定の方が決まると考えられる。それを期待するものである。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

東海支部

日本山岳会九十周年記念 東海ブロック晩餐会・行事

創立九十周年東海ブロック記念行事を一月二十、二十一日に実施した。記念晩餐会は名古屋駅前都ホテルにおいて二十日十六時三十分より、第一部の記念講演会から開会した。

最初に愛知学院大学エベレストサウスピラ登山隊一九九四の湯浅道男総隊長よりスライドを交えて四十分間の講話。次いで、日本大学エベレスト北東稜登山隊一九九五の神崎忠男隊長よりやはりスライドを入れての楽しい講話を四十分。

小憩ののち、会場を三階天空の間に移し、寺西中生支部集會委員長の開会の言葉で十八時十五分より晩餐

会は始まった。本部からは村木潤次郎会長、藤平正夫九十周年記念事業実行委員長、斎藤惇生副会長、小倉茂暉、神崎忠男両常任評議員、中川武常務理事、坂本正智、藤井正彦両会員のご出席をいただき、特別来賓として、中日新聞社の常務取締役・横内恭氏、ならびに朝日新聞社名古屋本社取締役代表の一方英夫氏のご臨席をいただき、出席総数は百六十二名であった。



記念山行の誕生山山頂で

まず主催者を代表して村木会長のユーモアあふれる挨拶に始まり、次いで尾上昇東海支部長よりお礼をかねての挨拶と続いた。とくに尾上支部長は、山岳会と東海支部の関係をお釈迦様の庇護の下で暴れ回る孫悟空にたとえ、今まで以上に本部との絆を緊密に保ちたいと強調した。来賓の祝辞は、中日新聞の横内氏と、本会会員でもあり、山屋を自認し、この年末年始もヒマラヤトレッキングを楽しまれた朝日新聞の一方代表からいただいた。

続いて、記念コンサートに移る。演奏は尾上支部長の母校でもある東海学園の中学、高校生で編成された交響楽団のフルメンバー、指揮は中学三年生の角田鋼亮君。ドボルザーク作曲の「新世界から」が素晴らしいハーモニーで演奏され、満場の大喝采を浴びた。アンコールには「雪山讃歌」が用意され、元氣一杯オーケストラの伴奏のもと全員起立で大合唱、会場の雰囲気は大いに盛り上がった。尾上支部長より指揮者の角田君と音楽監督の西村先生へ花束贈呈があり、コンサートが終了した。

やや遅れて懇親会に入る。まず、日本山岳会の粋な法被をまとった村木会長、斎藤副会長、尾上支部長による鏡割りで宴が開き、湯浅道男・愛知県山岳連盟会長の発声でマス酒

の乾杯となる。

会場には丸テーブルが用意され、中国料理のフルコースに舌鼓を打つ。各テーブルマスターのリードで自己紹介が始まり、近況報告や山の情報交換などで話は尽きない。つい時間の経過も忘れるほどで、タイムオーバーの九時過ぎ、尾上支部長の専売特許の一発締めでお開きとなった。

続いての二次会は、少し離れた東海支部ルームに移り、手作りのパーティー。村木会長始め本部役員の方々、支部会員六十〜七十人と、ルームは割れんばかりの大盛況で熱気ムンムン。終電車を心配しつつ歓談に花が咲き、散会したのは十一時を越していた。

翌二十一日は、山岳会創立九十周年を祝って、岐阜県美濃市西方の誕生山（五〇一メートル）へ記念山行を実施した。

本部の中川常務理事を始め、尾上支部長以下九十四名の参加があり、盛況であった。誕生山は長良川と板取川の合流する長良川の右岸にあって標高は低いが、当日は好天にも恵まれ、かつ暖かく、頂上からの展望も素晴らしく、その名の示すとおり九十周年を祝うにふさわしい山行であった。

下山後は山麓の農協広場を借り切って集會委員会手作りの「トン汁」



ケルンに石を積む高木隊長

高木崎男隊長以下十三名は、平成七年十一月十九日から二十六日にかけて台湾に遠征し、北大武山(三〇九〇メートル)へ全員で登頂した。頂上では、遠征直前エベレスト山系トレッキング中に雪崩に遭い、遭難死した石井恵美子さんへの追悼文と写真を埋め、全員でケルンを積んで黙禱し、冥福を祈った。また、台

台湾の北大武山に登頂

岐阜支部

とアルコールなどのサービスで、昨夜に続いての大盛況に、会員一同大満足。次の百周年記念までお互い元気で頑張ろう、と誓いあって記念山行を終える。

最後に二日間にわたり、お力添えくださった村木会長、本部役員の皆様方に心からお礼申し上げます。

(東海支部副支部長・長坂 博)

湾の五岳(玉山、雪山、大霸尖山、南湖大山、北大武山)へ登頂を果たした高木崎男隊長、藤井茂雄隊員を祝福した。

一行は十一月十九日正午に中正国際空港に着いた。ロビーでは、中華民國山岳協会蔡禮樂会長の出迎えを受け、夜は、同協会が催してくださった歓迎晩餐会に出席。蔡禮樂会長、中華民國体育運動総会郭宗清会長、台湾省体育会洪吉春理事長らに歓迎と激励のご挨拶をいただいた。隊長からは「大勢がお世話になりましたのでよろしく」とお願いした。続いて、今回案内してくださる高全輝さん、陳詩亮さん、林文雄さんら三人を紹介いただき、懇親した。

二十日、バスで台北市から南へ約三五〇キロの高雄市へ移動する。途中、台中市で警察局に立ち寄り、入山許可証の交付を受ける。

二十一日、二台のマイクロボスに分乗して高雄市を発ち、大武山系に入る。高砂族が住む「先住民保護地区」内の国家警察忠孝派出所に入山許可書を提示して届けを済ませ、さらに林道を登る。十一時三十分、標高一五二〇メートルの登山口へ着いた。昼食など身支度をし、十二時三十分、登りにかかる。よく踏み込まれたゴミ一つ落ちていない美しい登山道である。尾根伝いに急坂を四時

間かけて登り、十六時三十分、標高二一四〇メートルの清掃のゆきとどいた無人の檜谷山荘に着いた。現地調達した食料を調理し、夕食をとる。二十二日、四時起床、六時に隊長を先頭に出発した。斜度六〇度に近い急斜面や両サイド切り立った尾根を登って、十時に大武福德祠に着いた。昭和十六年頃、元日本軍が祀ったといわれる神社である。

ここからさらに北へ尾根伝いにピークを越え、十一時に北大武山の頂上へ登った。近くの尾根には、檜、杉、柏、シヤクナゲ、アセビなど高木や亜高木が繁茂していた。頂上では、持参した台湾ビールで乾杯、早田道春副隊長の音頭で万歳三唱し、登頂を祝った。一時間ほど休んで正午に下りはじめ、十五時三十分、全員無事檜谷山荘へ下山した。

夕食後は戸外でたき火を囲んで団欒、ウィロン茶をいただいたり、高さんが歌った軍歌の上手なのに驚いたり、よい天気に恵まれて無事登頂できた安心感から夜遅くまでくつろぎ、歌い、語り合った。

二十三日、四時起床、六時に下山にかかり、十時三十分登山口に着いた。二台のマイクロボスに分乗して林道を下る。途中、忠孝派出所へ寄り、下山報告をして屏東へ出る。ヤシの木に囲まれた静かなたたず

まいの屏東県庁迎賓館に、郭宗清会長、伍澤元屏東県長(知事)、黄清漢屏東市市長から昼食レセプションに招待され、登頂のお祝いを受けた。隊長は「高さんら三人の案内をいただき無事登頂できました」とお礼の挨拶をし、一同昼食をいただいた。十五日高雄市内に戻る。

二十四日、午前中高雄市の名所を観光し、午後汽車で台北市へ。

二十五日、故宮博物院を見学。

二十六日、お世話になった中華民國山岳協会の方々をお招きし、答礼昼食会を開催した後、帰国した。

(清水彦彦)

味の技、心でつくる



むさし 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有明1-5-2 ☎03-3504-1905

むさし 麹町店
(有明線麹町駅駅隣)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313

むさし 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015

友誼ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

図書紹介



カット 中村あや

早川禎治・著

『知床記―自然との出会いについて考える―』

知床の山を愛して二十五年、通い続けた著者が見てきたのは、蝕まれゆく自然であった。それは人為的なものであり、その因をなしている林野庁と、択伐によって森林を蘇生させられる、と主張する学者に対し、その前後を実地に検分してきた著者が、実例を挙げて反論し攻撃している。

文中、地元の自然保護運動の難しさは、都会のボンボンにはわからない、と嘆いているが、そうでもあるまい。自然保護運動には必ず、地元の経済的利害関係が生じるし、実施するのも地元の人たちである。都会にも自然保護運動に真に理解を持っている人々が大勢いるし、潜在的保護活動家も無数に存在している。

伐採した後に弱々しく育つ幼樹をもって、森林の蘇生と主張する学者や、給料捻出のため伐採を強行する林野庁に打ち勝つための資料となりうる、著者の入念な自然観察登山行が綴られた書であり、都会のボンボンにも、よく理解されるであろう。

(飯田進)

一九九五年八月 (現代文芸社発行) 三三八ページ 二千二百円

正橋剛二・解説校注

『立山遊記・立嶽登臨圖記』

時は一八四四年。加賀藩お抱えの儒学者である金子盤嶋と、同じく藩士の榎原守郁の二人が立山に登る。下山してすぐに、金子は紀行文『立山遊記』を著すが、榎原が地図に注記を加えた図譜『立嶽登臨圖記』を完成するのは、その八年後である。長い間世に知られていなかった両著を、一冊に復刻注解したのが本書である。

両著の成立の時期が前後したこともあり、一本にまとめたのは初めてのことだが、確かにこの二つは両方そろってこそおもしろい。地図(絵図)をたどりながら紀行文を読んでいくと、この時代の立山への道筋がよくわかる。

また、立山頂上からの展望を鳥瞰

図的に描いた榎原のスケッチは興味深い。富士山や浅間山も見えたようである。金子によれば、にわかには信じがたかったが「其の殊勝言語に絶する」と大感激である。その他、当日立山に登ったのは約二百人との記述もあり、思いのほか多くの人が登っていたことにも驚かされる。

(三好まき子)

一九九五年九月 桂書房発行 四二二ページ 三千九十九円

岩田修二／小崎尚・小野有五編

『世界の山やま―二分冊―』

月刊誌『地理』の増刊号として二月にわたり刊行された。

登山を対象とした写真集、解説書、登山史などは今までに多数刊行されているものの、山の成因、山の自然などがわかりやすく書かれたものは少ない。

本書は、地球上の山岳自然の全貌を描き出したい、との考えから書かれたもので、地理学、生態学、地質学、地球物理学などの山の自然現象の研究、教育に従事している人々が執筆者となり、一般の人にも分かりやすいようにまとめられている。

まず各地域の概説が、地形の成因、自然環境などの観点から書かれており、次にその地域の特徴のある山々

が、登山の歴史を含めて記されている。各巻末に次のような解説がある。

・人類にとっての山

・山の成因

・垂直分布

・山を削る作用

文中の多くの写真、地図、イラストなどとともに、山岳を登山という一角度からだけでなく、三六〇度見渡すことのできる、楽しく有意義な書である。

(茂見猛)

一九九五年九月・十月 古今書院発行 B5判 一六三ページ(九月) 一六五ページ(十月) 各巻二千八百円

大関 保・著

『ネパールヒマラヤの旅』

いつか自分の目で、足で、じかにヒマラヤの山々に触れてみたい、という想いをもつ人は多いことだろう。旅に先立って、ネパール語の習得や、ネパール事情の知識の吸収に努め、規格品としてのトレッキングでなく、手作りの山旅を心掛けたという著者が、一九七四年から九四年に至る二十年間に、自ら企画し、歩いたヒマラヤの山旅が、本書には十編収録されている。

現地の人々を相手に、そして自然を相手に繰り広げられるエピソード

の数々、行動の詳細。コースタイムや日々の天候、気温から食事の内容に至るまで記載されており、同じコースを歩く人には大変参考になる。最終のページにはUSドルとネパール・ルピー対円の換算率も載っており、二十年の間に、いかに円が高くなり、海外旅行が楽になったかが改めて実感できる。また最初の旅の末尾、著者が体験的教訓として記載している項は、二十年を経た現在も我々が参考とすべき点が多いと思う。

(渡邊玉枝)

一九九五年十月 柳穂高書店発行
三九七ページ 二千八百円

住谷雄幸・著

『江戸百登山図譜』

日本の近代登山の創始者としてイギリスのウォルター・ウエストン牧師が紹介されることが多い。北アルプスを名山として世界に紹介したことはあまりにも有名である。しかし日本の登山歴史は非常に古く、江戸時代にはあまたの「講」を中心に富士山頂を始め全国津々浦々の山々は征服され、信仰としての集団登山が盛んに行われていたのである。同時期のヨーロッパにおいては、山とは悪魔の住むところであって人間の近寄るところではない、という考え

山の切手⑥ 一相山之良 K2

エベレスト初登頂という栄光のかげに、同じ一九五三年アメリカ隊が行ったK2に対する果敢な挑戦は忘れられがちである。アメリカは、三年の第一次遠征以来、K2登頂に執念をかけてきた。第二次隊では、K2最初の犠牲者四人を出している。大戦後の長い空白を経た五三年に、第一次隊で隊長を務めたハウストン博士が、第三次隊を率いて再びK2

右・1988年5月19日インド発行。カシミール地方の帰属に納得しないインドがパキスタンの山を取り上げている。左・1954年12月25日パキスタン発行。イタリア隊初登頂記念切手。コンコルディアから見たK2。



を目指した。そのあとの出来事は、遠征隊の報告書に譲ろう。

この報告書は、伊藤洋平氏によって「K2―非情の山」として訳出・出版されている。原題は「K2 The Savage Mountain」だが「Savage」の語感にぴったりくる日本語が見当たらず、内容から「非情の山」にしたのだという。以後わが国では、この呼び名がK2の代名詞になってしまった。K2は現在でも世界で最も登頂が難しい山とされ、無事故で登頂を成し終えた登山隊は、全体のわずか一八パーセントにすぎないそうだ。十三人もの死者を出し、ブラック・サマーと呼ばれた八六年に続き、昨年またまた悲劇が繰り返され、「非情の山」はその本性をむき出しにしている。

K2は、一九五四年イタリア隊によって初登頂され、地元のパキスタンが早速記念切手を発行した。登頂国のイタリアでも、記念切手の準備が進められ、プルーフ（試し刷り）が作られた。しかしこれは不発行と決まり、プルーフの単片四十枚が残っている。数年前そのうちの二枚がローマのオークションに登場したが、見積価格は五十五万円だった。山岳切手のコレクターにとって、まさに夢の未踏峰といえる一枚である。



1981年8月20日パキスタン発行。2種連刷で、左側からK2、ロードピーク、ガッシャーブルム連峰を描く。右側は西面のK2。

イタリアの不発行切手。1984年4月29日パキスタン発行。パキスタン航空の中国就航20周年を記念するもので、K2の西面。

が基本であり、ヨーロッパ人こそ、高山に登り自然の中で生きる日本人を見て驚いたという。

著者自身が山岳愛好家であり、かつ元国会図書館勤務というだけあって、広範囲な参考文献は驚嘆に値する。古きを知り、新しい登山をしようと思う諸兄にはよい参考書である。

本書は一八〇四年江戸中期、山岳画家谷文晁の『名山図譜』として刊行したものに、十三座を加えて百名山としたものである。著者自身も多くを登頂しながら、時代背景をもとに山々の様子を紹介している。例えば富士南麓の愛鷹山では、「江戸時代には足高山と記されていることが多い。しかし『東海道名所図解』に

は愛鷹山または蘆高、あるいは足柄とも記す」と述べている。また文晁の選んだ八十七座に新たに追加した十三座については、当時信仰登山として盛んに登られていた山々を著者が選んでいる。

今日深田久弥氏の選定した百名山が定着した感があり、中高年登山者の登頂目標になっているが、その深田氏は文晁の選定に対し「低き山多し……」としている。比較対照してみると羊蹄山、岩木山、岩手山など三十七座を同じくしている。新たな歴史百名山として登頂目標にするのも一興かも知れない。(林栄二) 一九九五年十一月 小学館発行 二七九ページ 二千八百円

平成七年度海外登山基金について

海外登山基金委員会

今回の海外登山基金助成につきましては、平成七年十二月二十日までに応募のあった四団体について、平成八年一月十二日、海外登山基金委員会にて審査が行われ、

一月十八日の理事会において承認されましたので、報告いたします。なお、助成金総額は百万円です。

●七十万円 (財)日本山岳会青年部

●三十万円 (財)日本山岳会東海支部ウルタルII峰登山隊一九九六

以上の二隊です。交付団体には報告書及び会計報告が義務づけられています。

平成八年度の基金助成については会報九月号に公表します。

書籍受入報告 (1996年1月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
JAC自然保護委員会(編)	山の自然学現地講座No. 4 講義録 (1995. 2-1995. 9)	114pp/30cm	JAC自然保護委員会	1995	発行委員会寄贈
田中弘士	私の山行日記: 日本百名山踏破記録	238pp/22cm	田中弘士(私家版)	1995	著者寄贈
島根県山岳連盟(編)	モンゴル・アルタイ山脈ツァスト山登頂の記録 (1993)	82pp/26cm	島根県山岳連盟	1994	岡崎秀紀氏寄贈
島根高校教員登山隊(編)	モンゴル・アルタイ山脈バリラガチン峰は微笑む (1992)	94pp/26cm	島根高校教員隊	1993	岡崎秀紀氏寄贈
岡崎秀紀(編著)	サイハン・モンゴル: 自然・人・生活 島根とモンゴルの交流史	183pp/19cm	報光社	1994	著者寄贈
小堀一政 他(編)	ザイル: 明治学院大学山岳部50周年記念号	208pp/26cm	明治学院大学山岳部	1995	発行者寄贈
金井健二 他(編)	山と人80年 (神戸大学山岳部80年史)	418pp/26cm	神戸大学山岳部・山岳部	1995	発行者寄贈
阿部曉雄	秋田631山全登頂記録	254pp/26cm	阿部曉雄(私家版)	1995	佐々木秀氏寄贈
戸田博子(編)	志賀重昂: 回想と資料	287pp/27cm	戸田博子(私家版)	1994	編者寄贈
古平隆	獨標 (句集)	237pp/20cm	深夜叢書社	1996	著者寄贈
村上義千代	石油街の北上川下り (1969年11月)	53pp/31cm	村上義千代(私家版)	1996	著者寄贈
遠山元信	埼玉県内の三角点 (1995年度版)	65pp/26cm	遠山元信(私家版)	1995	著者寄贈
Klier, Walter (ed.)	Berg' 96 (Band 120)	304pp/27cm	D. Ö. A.	1996	発行者寄贈

(D.O.S.: Deutschen und Österreichischen Alpenverein und vom Alpenverein Südtirol)

ルーム日誌

29日	25日	23日	22日	19日	18日	17日	16日	12日	11日	10日	9日	8日	5日	1日	1月
資料委員会	指導委員会	フィロムビデオ委員会	総務委員会	学生会	理事会	委員会	常務理事会	山基金委員会	山の自然学	山研委員会	アルパインスケッチクラブ	総務委員会	総務委員会	年始休みのためルーム閉鎖	
1月来至者526名	学生会	アルパイン	青年部				三水会		海外登山	青年部	ジャック	図書委員	データバンク委		

会務報告

一月理事会

日時 平成八年一月十八日(木) 十八時三十分～二十時

場所 日本山岳会会議室

「出席者」村木会長 中村、斎藤、宮下各副会長、大屋、中川、大谷、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、村井、神崎各常任評議員
「委任」吉永理事、大倉、大森、重廣各常任評議員

【審議事項】

(一) 書籍、撮影物使用許可願 大屋 テレビ信州十五周年記念番組『美しき大地と共に―上高地の懐に生きる―』の中でW・ウエストン著『THE JAPANESE ALPS』からの引用許可願が(株)テレビ信州報道制作部から出された。番組内で書籍名と協力スポンサー「(株)日本山岳会」を入れる。放送日は一九九六年二月十二日十五時～十六時三十分。承認
(二) 行事協力・名義後援の件 大屋 石川県産業展示館において四月五日(金)～七日(日)に開催される金沢アウトレッド・フェスティバル96に対して(株)石川テレビより名義後援が要請

された。

(三) 夫婦会員の会費の件 承認

夫婦会員に対する減額は通常会員に限るべきではとの疑義が出されたが、通常会員外の場合でも、印刷物「山」「山岳」等も一部配布であれば、定款運用の範囲内と解釈して名譽・永年・終身会員でも減額が妥当と認める。

(四) 海外登山基金助成の件 承認

一月十二日(金)の海外登山基金委員会において、申し込み四隊について審議の結果、本年度の助成金の支給は次の二隊に決まった。(本年度助成額百万円)

① 日本山岳会青年部

K2登山隊一九九六……七十万円

② 日本山岳会東海支部

ウルタルII峰登山隊……三十万円

(五) 日本山岳会青年部 K2登山隊 承認

一九九六について 宇田川

① 目的・世界第二位の高峰K2(八六一メートル) 南南東リブから

の登頂

② 隊の構成・九大学より十八名の参加、医師一名、特別参加一名、計

二十名

③ 登山日程・一九九六年五月二十一

日先発隊出発～八月末日帰国予定

(六) 山岳傷害保険の件 承認

中川

前々回、前回に引き続き調査を続

けてきたが、生命保険会社では搜索

費用の組み込みができないために、

損害保険会社に限定。前回提案の(株)

東京海上火災で搜索費用五十万円、

百万円の二種類選択契約が可能の見

込みとなり、さらに交渉を重ねて総

務名義で「山」に広報掲載し、個人

申し込み募集の運びとする。承認

(七) 委員会委員追加承認の件 大屋

・データバンク委員会委員

松尾良久(五八・一六)、溝口洋三

(一〇〇九九)、清水亨(一〇二八

五) 承認

・百年史編纂委員会の編成

理事 南井英弘

委員長 中村純二

委員 松丸秀夫(顧問より移行)

岩淵泰郎

松田雄一

中島 寛

上北和夫

顧問 望月達夫

織内信彦 承認

【報告事項】

(一) 日本スポーツ賞受賞について

マカール登山隊 渡邊

読売新聞社制定の日本スポーツ賞

団体「山岳」部門で日本山岳会マカ

ール登山隊が選ばれ、一月十八日表

彰式が行われた。藤平総隊長他二名

で出席、受賞を報告するとともに本

部にとろふイーと賞状を披露する。

(二) 「山岳」について 田邊

会員名簿と同時に発送する。

(三) 会員名簿について 中川

二月十日印刷完了の予定であり、

ただちに発送作業にとりかかる。な

お、会員名簿刊行費用は広告収入で

に努力された方々にお礼申し上げる。

【委員会報告】

● 遭難対策委員会

① 平成七年十二月十六日(土)、日本レ

スキュー協議会(本会も構成団体の

一員)主催の「冬山安全登山シンポ

ジウム」が代々木オリンピック青少

年センターで開催された。約百五十

部にとろふイーと賞状を披露する。

(二) 「山岳」について 田邊

会員名簿と同時に発送する。

(三) 会員名簿について 中川

二月十日印刷完了の予定であり、

ただちに発送作業にとりかかる。な

お、会員名簿刊行費用は広告収入で

に努力された方々にお礼申し上げる。

【委員会報告】

● 遭難対策委員会

① 平成七年十二月十六日(土)、日本レ

スキュー協議会(本会も構成団体の

一員)主催の「冬山安全登山シンポ

ジウム」が代々木オリンピック青少

年センターで開催された。約百五十

部にとろふイーと賞状を披露する。

(二) 「山岳」について 田邊

会員名簿と同時に発送する。

(三) 会員名簿について 中川

二月十日印刷完了の予定であり、

ただちに発送作業にとりかかる。な

お、会員名簿刊行費用は広告収入で

に努力された方々にお礼申し上げる。

【委員会報告】

● 遭難対策委員会

① 平成七年十二月十六日(土)、日本レ

ゴールデンウィーク 特別 ツアー
ネパール・ヒマラヤとK2・カラコルムを一度に
4月30日(火)～5月12日(日) ￥378,000より
●エベレスト展望とシェルパの里13日間
●アンナプルナ・ダウラギリパノラマトレッキング13日間
●ランタン・ヘリトレッキング13日間
+カラコルム・エアーサファリ
■ツアーカタログをご請求ください■
アルパインサービス株式会社
〒105 東京都港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階
東京 03(3503)1911 仙台 022(265)4611 名古屋 052(581)3211
大阪 06(444)3033 広島 082(542)1660 福岡 092(715)1557

名の参加があり盛会であったが、本
会会員の参加は少なかった。日本レ
スキュー協議会の活動も地道ではあ
るが着実に充実してきており、今後
も会として、より一層のバックアッ
プをよろしくお願いしたい。

②平成八年一月二十一日(日)に谷川岳
天神平において、日本山岳レスキュー
協議会主催の「雪崩対策研修会」
が開催される。本会からは遭難対策
委員長の熊崎他指導委員会委員二名
と学生部委員長、副委員長の計五名
が参加予定。日本勤労者山岳連盟、
日本山岳ガイド連盟、東京都山岳連
盟など他団体との技術交流を図るよ
い機会であると考えている。

●総務委員会 ①二月二十四日(土)
二十五日(日)、全国支部事務局担当者
会議を水道橋・グリーンホテルで開
催。テーマは「九十周年記念行事を
振り返って」「百周年の夢」②三月十
六日(土)十三時三十分、本会ルームで
新入会員オリエンテーションを開催。
●集委員会 ①一月十三日(土)十五
日、磐梯・吾妻高原スキー懇親会を
開催、六十名の参加者があり、盛会
であった。②四月十四日(日)、サクラ
ハイク(九五年に入会した会員を中
心に)開催。③五月二十五日(土)二
十六日(日)、若葉会山行、新潟入広瀬
村をベースとして周辺の山に登る。
二十回記念のイベントを予定。

INFORMATION



◆第二十回記念若葉会山行

集委員会

第二十回を迎える若葉会山行を、
越後支部の後援で行います。

日程 五月二十五日(土) 金城山・雲
洞庵 二十六日(日) 浅草岳

宿泊 国民宿舎・浅草山荘

集合 現地 二十五日六時・雲洞庵
東京 二十四日(金)二十三時新
宿駅西口スバルビル前(バス)

会費 現地参加 一万四千元(懇親
会・写真代・保険料を含む)

バス代 一万三千元

申込 住所、氏名、性別、年齢、会
員番号、バス乗車の有無を明
記の上、ハガキで集委員会
宛、五月四日(土)必着。定員八
十名。

*申し込んだ方に詳細案内を送付し
ますので、会費の事前納入をお願い
します。

◆つくばの地質標本館と

宇宙センターの見学会 二火会

日時 四月十五日(月)
集合 常磐線「荒川沖」九時十五分
上野発七時五十三分勝田行ま
たは八時十一分土浦行に乗車

講師 神戸信和氏

会費 五百円

*自由参加です。係/柴沼・熊谷
◆芽吹きと新緑の八甲田山を滑ろう
後援・指導委員会

日時 五月十一日(土)十三日(月)

内容 東京・青森往復は飛行機使用
山スキー(シール必要)

費用 約五万六千元(宿泊費、食事
弁当、バス、ガイド代など)

申込 千一八四 小金井市緑町四一
二二四一〇六 倉井登代

TEL 〇四三三八三一九〇七七

締切り 四月十日(水)

◆ヒマラヤに架ける夢'93'96写真展
主催・ヒマラヤ保全協会
(会長・川喜田二郎)

東京展

日程 三月十二日(火)二十一日(木)

場所 コニカプラザ

大阪展

日程 四月十一日(木)十七日(水)

場所 コニカフォトギャラリー

◆乗鞍温泉ハイクのご案内

94同期会

日時 五月十八日(土)十九日(日)

場所 乗鞍高原(民宿泊)

集合 十八日十七時・乗鞍高原民宿

費用 一万円(宿泊一泊二食) 予定
交通費などは各自負担

申込 会員番号、住所、氏名、電話
番号を明記の上、返信用の封
筒(八十円切手貼付)を同封
して、四月十日までに。

〒一五二 目黒区碑文谷六一
二一〇 福田博信宛

TEL・FAX 〇三三三七一一〇四
五三

創立90周年記念事業募金応募状況

(2月8日現在)

(累計1,570人 4,356口 21,777,603円)

●15口(75,000円)

中村テル

●2口(10,000円)

青木枝朗(計4口) 柳沢勝輔

横山宏太郎 山本利枝子 熊本

道夫 鈴木鎮夫

●1口(5,000円)

安藤幹(計3口)

●0.6口(3,000円)

小尾勝

日本山岳会会報 山 610号

1996年(平成8年)3月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 村木潤次郎

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社